

貞丈雜記

七之下

73
6592
14



中をのむ人の盃を別人とて又中をのむ事ある

一 今徳利トクリと云物を古湯スビといひる之むろくハヤまねの徳利也
皆湯を作りしむ故まどと云し

琅邪代醉卷云
柳瘿樽也曹植
詩我何柳瘿
云柳木ノコブテ
ル所ヲ以テ酒器造
ルヲ西土ニテト見
ス

一 柳樽ヤナギと云物の木を作りしむる手樽テダのありしハ切の木さる
の木をとりて平くたすひのゆく作りしむるを柳樽と云古の柳樽
とハ大不遠あり古柳を用ひしむる柳木ハ庭をその有る木を水
氣ある木をわけし樽ありて酒をぬる柳をま用ひし
一 又云柳一荷ニ荷ありを云ハ柳を作りし樽一酒を合ふ柳一荷
と云と中説眞ニ荷ありの文の時記云二月廿七日此方所
能ノク有タル此柳五荷三荷あり 清湯殿上の日記ニイナカ哉荷

と云ふは近年諸藝才賣買代物は云をきぎの代古酒百文別

三枚新酒百文別四枚ト云くこれらの文を以てんれハ阿多

百濟寺ククラテノ十カ柳道通院實隆公家集也を造り出さる地名ある

雪玉集道通院實隆公家集也は寄酒述懐と云題をよめる 此むるハ交時カタノもち

うき天妙酒川と云く一て人のをぬるしと云く正月の事始

記云天野酒河内國ミナ乱事ある村ハ京都まで柳樽を進上

毎年二月七月十二月ノ朝日畠山殿ヨリ駿蛇千本白鳥一天野酒五荷
將軍家エ進上アリシ度東山殿年中行事年中恒例記等ニ

見タリ河内國ハ畠山殿
ノ領地ニテアリシナリ

一 銚子提子テウシヒサケ蝶形を付る事ハ蝶ハのどくある日ハ少く草木
の花の香を吸ておのの友トモとおほせおとびあそぶ

一 祝の綿をうつる
 蚕の繭をあらう
 う子を多くくむ
 物入のものを
 以て子孫繁昌を
 祝ひて蚕の繭の
 形を桃子に作る
 と云へば祝の婚
 礼をまじへば
 虎のまじへば
 也

人もそのごく酒をのこし人の中よりまじりて
 腹をいさうひあどすよのぬる也これ酒のむ人蝶の花
 の形を吸てあまびのむむせといふ教のなる蝶の形
 形を付あり瓶子は蝶花形付あり目心也
 一 瓶子一對口を蝶形に包む時左の方より右の方より
 右の方より並ハ女蝶也

一 一条の綯書は祝言の時ハ瓶子の口を蝶花に包まざる
 包むと云はれぬと何り是ハ瓶子授子と瓶子一對と
 蝶形ははめハ蝶の紋甲よりまじり四の字を忘む也
 一 瓶子の口外に包紙をまじりて形を包むははるはる也

といふ菱ハ水草を水底まじり志なり印のこま
 つよき物入をびこり志なり印のこま酒も
 水取の物ある花菱の花形を口を包む也

一 瓶子授子は祝の時松山たち花を蝶花形に包む
 て付る松ははる色うらまじり年を継ぐ物ハ山たち
 ハ冬はまじり雪霜といふ中実も赤く熟する物也
 二品ともよめまじり物ある故祝に用る也

一 瓶子の柄を包むる、あまじり京都將軍殿中にて用
 何れハ瓶子ハ柄を包むる大草流式之膳部記京都將
 軍家の
 庵丁人大草三郎
 左工門尉云以ノ記 瓶子の柄をつまはる為流ハあまじりあり

東鑑卷世酒杯八
片口銚子置折敷
上銚子覆盃

古今著聞集卷十四
云白河院深雪ノ朝
雪見ニ御幸アルニ
テ中畧朽葉ノカサミ
著ル童二人ヒトリハ
沉ノ折敷ニ玉ノ盃銀
血ニ金ノ橘一フサヲ
モラレタルヲ持タリケリ
一人ハ片口ノテウシニサ
ケラテ持タリ去リ片

ロノテウシト云ニトテラ
モロク千ノテウシモ吉
ヨリ有シラ考ベシ
海人藻芥云山名修
理大夫入道 紀州佐別
兩國守護
一比仁和寺ニ居住之
間年始ニ器向彼宿
野之処ニ献メ義アリ
毎度各鐘也銚子片
口ヲ最タリ此事高
尾張入道以正難之
云銚子口最事ハ全
分略儀也彼禪門家
中ニ不足ナリ云云於以
正難不肖身片口銚
子以下祝儀式ノ具
足ハ武州師直が代ヨリ
京中職人給之間如
形不足ナシト云

真板持系記云活銚子の柄包ハ中殿中ハ世ニ是あり云
されバ柄を包む法式ハあきる也又銚子をバ一馬ニ枝と
云也旧記見スあり

一 モロク千 両口の銚子ハ畧儀之古殿中ニハ片口を用ケル一魚板持
系記云此後の時ハ片口ニシテ一式膳部記云公方極成を
其外さらし一ある時ハ片口ニシテ系ハ口をも包むるあり
自然ク口あき時モろ口ニシテハ口の包括ヲ他流ハ木
の葉をのひたどるこの幸山一向あきるよ云々桑ノ葉書
云云式三献為の時ハ盃の時ハ銚子ハ口可成之公方極成ハ
正月五月ニ外寄朝ハハ口ハ白シ 白ハ白めりきん宗
五一冊校書あり

活酒も白酒也又私持々片口にてしあけられし頃の口を包む
也出陣の時も其外祝言も口ハ銚子を可用云今世
片口の銚子絶て皆ろ口斗あり一説にてろ口の右ハ切腹
の人ハ酒のすすむ時ハ口より酒を出さず常ハ包おくと云
ハ何れもろ口の考ハ切腹人の用意ハ口を付付ておくハ
あらずもろ口のてしハ大酒をりて客人入るごとく吞
寸右の人ハ丸の人ハ酒を盃ハ入登きある両方ハ口を付
あるハ切腹の用意ハあらず切腹人ハ酒のすすむ時
右の口より酒を出さず銚子の持持ハ丸とて丸
右の手を取って持て送り也右より酒出る事右口を

用ゑハ乱酒の時斗あり

一 此の酒と云ハ今まの筒ツツの酒と云ハ同一又さく元と云ハ
の葉をさくとも云ハよりて升筒シヨウツツの酒を分故さく元と云ハあり

一 今時蓬菜ホウライの湯スハコ基と云 洲スハコの基スハコ三の山を作り松竹霍急

あどを作り 三ノ山を有をわき置るの昔より別するこれち

風流のるそ親式シヤクシキのりシヤクシキハあさすきと酒島の興キョウ出ま

又花多をど作り物して盃をおく盃基も有今の世のごとく

祝儀イハヒハ必蓬菜ホウライを用と云はハか 東鑑トウカン卷四十九正元二年四月三日

庚子晴ケイシ入御イノミ于入道陸奥守亭チヤウシヤウ御息所御同車ミヨクシヤウ御息所後

方ハタチ進風流シユウフウリウ造蓬菜ツクリホウライ云く又鎌田草子リヤマクサコ云君の是追の以下向を期

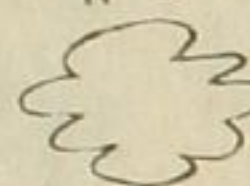
乃老んがくうんげとどんど 蓬菜ホウライ 標組ヒラキ 君をい

アさんアサノあわうういの志シ組クミみミ魚イサと志シのとり入イ年ネンまマいイハ


五人の子イノどもをババみの己の國クニあまアけの山ヤマ志シのりリまマいイハぬ

又マタうウりリのノおオきキはハおオ不フあアをヲあアりリてシい

一 今世イマヨ島基シマキと云物昔も有ア古ハ嶋シマ形カタと云蓬菜ホウライも嶋形シマカタの因イ之

洲シマ演エン形カタ  ぬヌ此コノ基キの板イタを作り海中ウミナカの湯ユのまマをヲいイはハりシ出デる

形古カタコの圖ヅのめメくあるを洲シマ演エンと云イされを嶋形シマカタも洲演シマエンくとも云

其ソノ上ノ有アを盛シメるル  此コノ上ノ有アを盛シメるルを置オケく太平記テイヘキ卷廿

四ヨ天龍寺テンリウジ供ク 云御前ミマエ風流フウリウの詩形シカタを居イり大井川ダイイカハの景趣ケイソ

を表ヲして水紅錦スイベニを洗シひて感興カンキョウの心を添ソりけケるル 貞丈サダタカ按ア洲演シマエン乃

永享堂町殿行幸
記云志保所蓋基
とあり則嶋基ヲ蓋

又選注云竹葉酒也云

本草綱目竹葉酒治諸風熱病清心除痰淡竹葉煎汁如常藥酒飲云

菘ハ有を盛のうまあふ古禁中にて草合花合根合おと云て色くの物を合せ秋をよみて興せしめり其合せ物をハ多くハ洲漢の菘を作りてそれ子のせて出されり多榮花物語古今著聞集其外古き物語ハ云く云く長き菘之

酒をさくともく云んとも云ハさくハ三く也く云んハ九献之酒ハ

三三九度呑むを祝ひとする故九ハ陽数ヲそのめでさき故也

唐土にも九献と云ふあり左傳僖公十二年の条云楚子季子鄭

九献と何りもの註云用上公之禮九献酒禮畢云

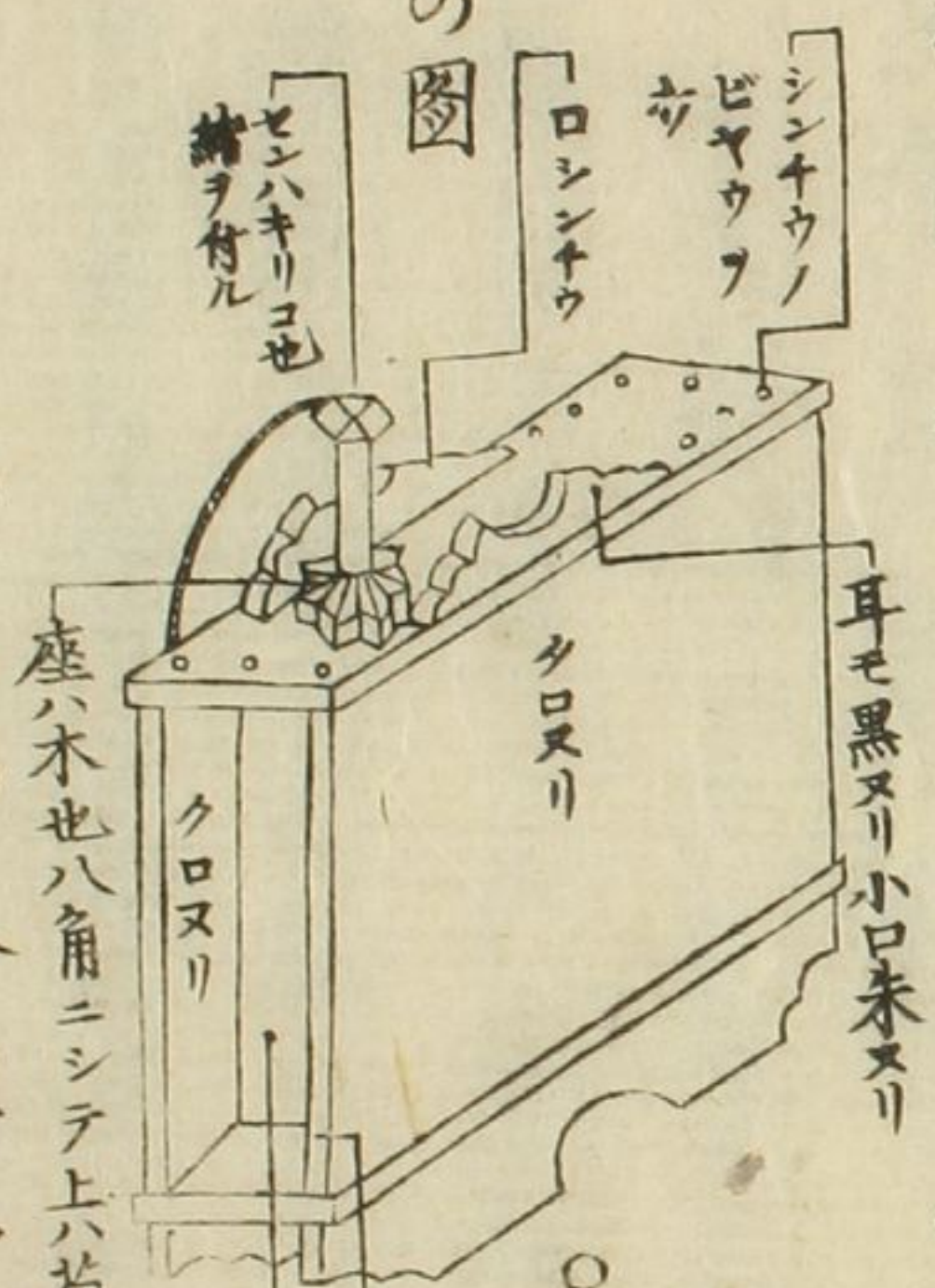
一 正通云云云云と云ふはあはれ貴人の礼前各州出され

は酒路の多の一陸の妻人の礼前め出されり時ハ通ると云常

一 さく搦のる尺素佳来云 系於好琴 例式指楯一個傳桿西三

とありさく搦ハ箱をさく搦はさく搦のゆひびるとハ常の柱
を入て 入るをさく搦のゆひびるとハ常の柱
ぬおるれは後ハ何と云ふもあはれ 依て是を繪圖を記す

指楯の圖



右のさく搦大なるも小きもあり今ハ世上ハ沢山ハあり

一 今時蓋は用ゐるものけは内ハありとて玉器の内をさく搦
星の柄もやきこる玉器あり内ハありとて名ハ田記ハ見及む

さうぬ本あるは、花の木のあはらむとあるは、又上を削り
花の池橋の記あり

一 東鑑卷三十は、鈿子覆蓋とあり、又あり蓋を覆ふ云六

鈿子はいぬとせき物に倣う、折をどの類をかくして

覆ひおきたるを云あるべし

一 一かゆー^固と云る、犬追物の時酒のむろを云之、蜻川

彩衣の耐親元日、記は文明十三年七月二日貴殿浦

上へ、出胡犬何り^{中畧}、書以後こぐー、此の川河系家

とあり、犬追物あるげは馬場、孟稚子有持出、耐子馬

上あり、河のむろ、犬追物の書あり、河を、力を潤い、

をかくむろ、あるを

一 三間の御所^{カサヤ}の糸の池一献と云る、旧記も、主殿のあは

流、既三書あり、一同、別主殿、その池一献あり、庭上^井一居

給、既の前、その事、はあ、

一 大鼓樽^{タイコ}と云物むろ、あり、物と急^キ度、物と

はあ、進物も、せ、用集^{永正天文}の、云大鼓樽、あり

一 唐靴子^{カラハシジ}之事、鎌倉年中行事云、正月、教日、唐靴子、二重は

唐靴子、同靴子、攪有、唐靴子と、かね、

靴子あり、又、木を、作、

ら、唐めきたる、唐靴子と云ある、外子細あり

天鼓樽の形ハ舞床
の大鼓乃取て上の
衣貨此木を口した
るハ草の如し此
園林は長考と云
傳世あり

増入記あり

一 此のやえの事、蜻川記に云ホ一の油單布ニ油引ク也の事ぬきこへば、
 此の但旅の時、此の事もい板へ、
 油單がけぬいり、及不山一匠、雨風は、
 さし山辛度、
 實に云はこへ、
 及山女中、
 一 輿のあてむ、
 供託あり、
 むらちを引出、

花のまこれおろされ、
 此の儀、
 よく、
 法用、
 輿、
 一 近來、
 京都將軍時代、
 と云輿見、
 一 古、

あんなの字あを
と云ふ云太平記
卷十二云四郎入
道を備は衆せ
て血の付る惟
を上三引覆ひ
あり

獲字タタコト
ヨム也

活免を受くる人ハ輿ヲ乗ふこゝハ免あき人ハ騎馬あり
出家もども輿に於てれぬ馬に於てある人乃云今の駕
籠あてハ中古旅人をもをのせ又合戦の相手員をのせる為
作り出する物と古老の物語又云今の駕籠衆あて云
物ハあんぐと云物を後ハ結構作りあたる異本曾我
物語河津最後の条にさそ有べきはあざれハ俄に何んだと
云物むむあき尻をかきのせて宿所ハをハゆりたれ云ハん
と云物ハ旅人を乗する駕籠也山駕籠と云物ハあん
あつとも云ハ和名抄ニ云篋輿和名 アミイタと何り是ハんを乃
字あべーアミをアんとソハイの字を略してアミと云ふ

源氏物語にハげ
んがさちの衆物
とあり善賢菩薩
の衆物ハ白象あり
これらものハ
馬もの衆物あり

籠乃輿と云物何レ太平記才三ノ卷 主上笠置 云日頃の
行幸ハ車ハハリて風鞦天子のハハ数万の武士ハおかこすれ
月卿雲客ハ何やげある籠の輿侍馬ハた虫けのせられて七条
を東ハ河系をのりハ六波羅トハを路云ハ籠の輿と
云物ハ今の駕籠衆の類あるトハ
乗物と云輿車コシケルモの熱名也源平盛衰記世ハの卷友時森重衛 中將 之評条云
悦トモトキで友耐トモトキして乗物出内裏卷ス女房母ハ海トモトキ
思トモトキ正トモトキけトモトキきトモトキどもトモトキせトモトキあトモトキてトモトキ志トモトキ此トモトキ終トモトキりトモトキハ車トモトキハめトモトキハ出トモトキ給トモトキハトモトキるトモトキ云
車を乗物といひトモトキ云也
一車ハ後より乗るトモトキハ前よりトモトキハトモトキるトモトキ云也
盛衰記世三本曾
院系ノ条ニ見

雜記七

世三

輿ハ前より後をとおより下りあり

一 さいろぼく黄色輿也是も前云塗ありと黄色の漆を

ぬりぬる婚入記云ありと云又よめむのひの

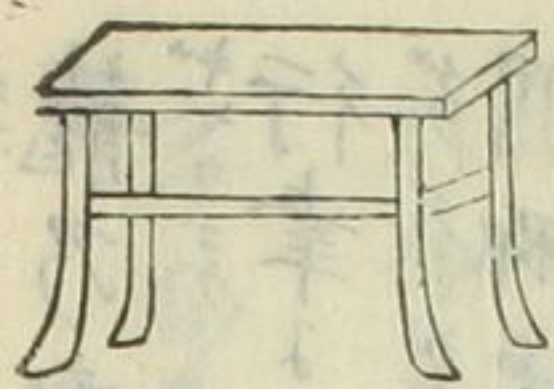
時をのりて常の町さいろのあり云黄色輿も塗輿あり

一 漆をのりて輿をのりて基のりて婚迎記に繪圖あり山

式部少輔亭御成記
又漆をのりてとあり

一 ホー基と云ふの長柄をまわくおくま板のりて

四足あり本名をばちと云也榻の字也車は百々耐用之



榻 如此物也

車の志ハ金物もあり
あけまきをいなりあり

一 ちよくまんハぬりてのりて年中諸大名に成記はちよく

まんとして為のぬりてのりて糸肉もなるとちよくまん

ハ直輦と書あるハ走流故実ハハ直輦と
アリ簾の字ハ遊ナルヘシ

一 檳榔毛車とハ車の座敷の上を檳榔といふ木の葉をとおひ

飾する車也檳榔の葉ハ大くして檳榔の葉のりて檳榔

の葉を耐ハ管の葉を代り用多ク此檳榔毛の車は町車の

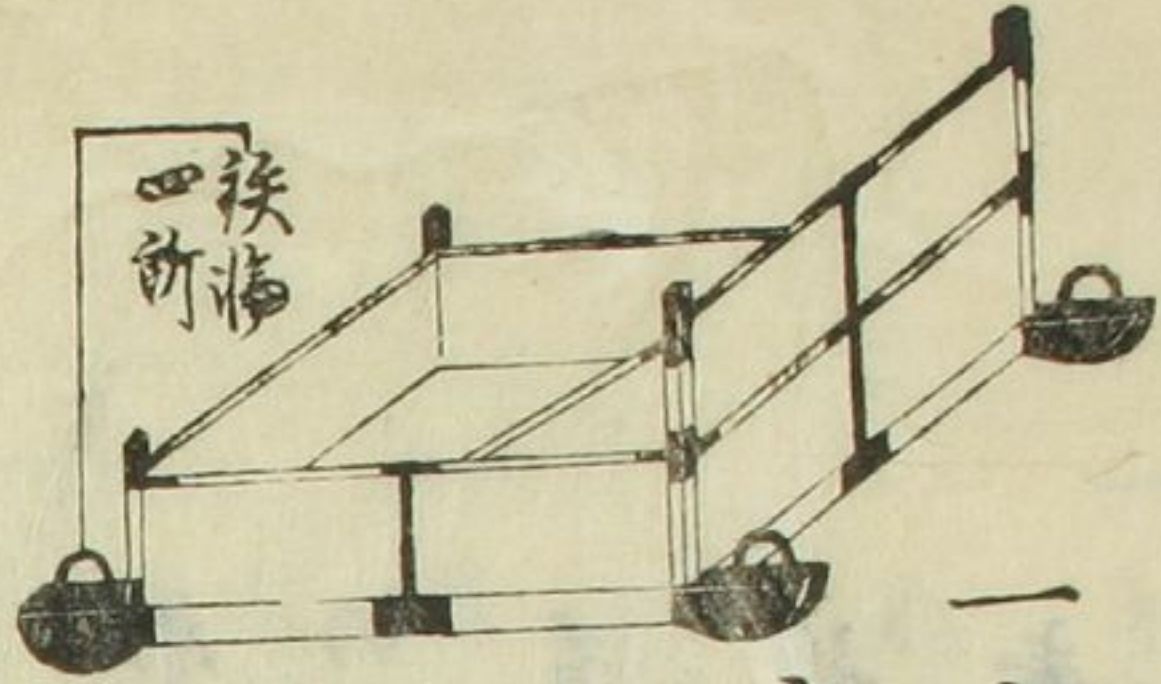
道具も定り何り一条攝政兼良公所作の柘葉葉云檳

榔毛赤色の簾錦換芳末濃下簾金銅金物榻云西宮記云檳榔毛ハ太上

青簾青末濃下簾金銅金物榻云西宮記云檳榔毛ハ太上

皇以下四位以上通用貞文云檳榔毛ノ字ハカザル車也鑑ノ

伊作多宝寺
塵取之圖



或人所藏之圖
ヲ以テ尤大補入

也檣柳ノモト云事ニテハ無之ビリヤウ本字ハ蒲葵也古ハ此字ヲ知ラ
ガリシユハ檣柳ノ字ヲ借り用ヒタルナリ

一塵取ト云物も輿乃類也日置流法要録抄ハキリクハウヨクセウに輿カノ行ヤ合カなる

時キタイニシデの式キタイニシデ并ナ手テ一打ヒのウ多ク也ナリ中畧ナリ又下シまシれミをセ

ぎぬ出ルる輿カもカるカまカへカちカをカとりカはカうカちカもカけてカ通カるカ也ナリ

〜と何カり又太平記卷廿九合戦カクセンは痛イタ手テをツ負ツひツうツけツるツ也ナリ

馬ウマハカ糸イト得エぎギ〜と塵取チリトリノカ昇ノボぎギをカ遠トホのカ路チノカ来キりカけカるカ云ク〜

あをアだダ〜と五石イシをカもカとカびカ〜と何カもカちカりカあカ〜とをカもカのカせカ〜とをカ〜と
その形カ何カをカ〜と似カぬカものカりカ相カあカるカものカちカもカ〜と〜とあカ〜と〜とあカ〜と
考カはカあカ細カ志カ致カす

貞丈雜記卷之七

